R－3

別島での冒険

芳田尚哉

　なんだかんだでレイファ……と云うより紫藤家が所有する島、紫藤島――通称レイファ・アイランドに到着した。
　やはり、あの船は速い。これで快適ならなおよしだったのだが……色々とあって、生きた化石と対峙して、死にかけて……とにかく大変な目にあってしまった。
　まあ、これからもなにかあるに決まっている。このメンバーでなにも起こらない方が不思議だ。
　だが、できるだけ平和でありますように……そう願わずにはいられない。
　そんな脆い希望を抱きつつ、上陸する。
　しっかし、ぱっと見は本当に無人島だよな……あの木の蔭から家が見えなきゃ、無人島に漂着しちまったかと思ってしまう。
　そんな事を考えている間に、紫藤家が所有するイージス艦エンディミオンⅢ世が離れていく。
「エンディミオンⅢ世には、少し離れた場所で危険がないか探知してもらいますので」
　と、俺がイージス艦を見ている事に気付いて説明してくれるレイファ。
　この物々しい警備はさすがなのだろう。これもいわゆる箱入り娘ってヤツなんだろうな。まあ、こいつの場合は金庫入りとか、すんごい箱なんだろうけど。ちなみに歩は自由奔放にさせているので、箱入り娘でもなんでもない。強いて云えば、段ボールくらいだろうか。まあ、そんなもんだ。
「お兄ちゃん、今なにかよからぬ事を考えてたでしょ」
　俺を睨む歩。
「な、なにもそんな事……落ち着けって、歩」
　なんとかなだめる。でないと、お花畑のお姉さんとご対面させられてしまう。お姉さんは別にいいのだが、お花畑は……って、やっぱヤだ。
「では、別荘に向かいましょうか」
　こうして、波乱の第２章が開幕した。

〈次回予告〉
　今回からはこの俺、渡瀬章一郎がおおくりするこのコーナー。前の二人は嫌々やっていたようだが、俺は違う。ノリノリだぜぃ！　どんな予告も文句を言わず、面白おかしくやってくよん。つうわけで、早速記念すべき最初の原稿いってみよーっ！
　男は女の幸せを祈った。女は男の幸せを祈った。だが、その祈り届かない。あぁ、世は無常。その祈り無と消える。
　ちゅぎのお話は？　次回、第２話【１９番目の文字】
　届けたい、この祈り……。
　なんだか、嘘ってバレバレな予告だけど、面白ければそれでよし。

でも、元ネタをわかる人ってどのくらいだ？
ちなみに、俺は原稿を破ったりしないぜぃ。

【屋敷の異変】

　レイファんち 家の別島にある別荘に向かう。
　しっかし、これが別荘の大きさなのか。紫藤家の本家よりは小さいが、そんじょそこらの屋敷よりは広いだろう。
　その横にはヘリポートがある。そういえば、緊急時のために……っていう説明を受けたっけ。
　百聞は一見に如かずってマジだな。話だとなんとなくしかわからんが、実物を見ると感嘆せざるを得ない。
「さあ、別荘に入りましょうか」
　その声を合図に、新見さんがドアを開ける。
「すっごーい」
　歩が感嘆の声を上げる。
「これが紫藤家の別荘か……」
　渡瀬は物色するように見る。ある意味視姦だ。
「すごいな……」
　そんな俺もついじっくりと見てしまう。人の事は云えないな。
「みなさん、そんな所に立っていないで、入って下さい」
　気付くと、俺たちはドアの前に立ち尽くしていた。みんながみんな見とれていたようだ。
「皆様のお部屋は二階になります」
　新見さんがそう言って階段を上る。
　その時、俺は違和感のようなものを感じた。なにかが変だ。
「どうしたの、お兄ちゃん」
　歩が俺の様子に気付いて声を掛ける。
「ああ、なんか気になって……」
「なにが？」
「わからない」
「はぁ？」
「だけど、なにか変なんだよな……」
「どうした、不動兄。船酔いでもしたか？　それとも、まだ霧の魔法の効果が継続しているのか？」
　なんだろう……えっと……。
「あーっ！」

〈次回予告〉
　まだ二回目だけど、結構楽しいな、このコーナー。まあ、ネタがわからない限りはさっぱりなんだろうけどな。とにかく、楽しく原稿だ！

カエルが降ってきた。カエルが降ってきた。カエルが降ってきた。カエルが降ってきた。
ちゅぎのお話は？　次回、第３話【大騒動！　カエル王国】
くっつけて消すのだ！
ちょっと時期をはずしたような気もするが……。まあ、いっか。

「どうした、不動兄。なにを馬鹿な声を出してるんだ」
「そうだよ、お兄ちゃん。馬鹿な事やってないで……」
「違う。気付いたんだ。この別島の別荘は夏しか……というか、久しぶりに使用するんだろ？　なのに、どうしてこんなに綺麗なんだ？　もうちょっとさ、埃くらい……」
「愚かしいですわね。見損ないましたわ。そんな事なんて答える必要もない事ですわ。清掃部隊が先に来て準備は済ませてあるに決まっているではないですか」
「ホントだよ、お兄ちゃん」
「愚かだな。それくらい当たり前だろ」
「……くぅ」
　どうしてこんなに言われなきゃならんのだ？　歩や渡瀬まで……可哀相な俺。だが、考えても見れば当然だろうな。俺が馬鹿でした。
「さて、とにかく……」
「ねえ、レイファさん」
　渡瀬の言葉を遮って歩が言う。
「なんですの、歩さん」
「丑の刻参りしてもいいですか？」
　……沈黙が支配する。
　だが、彼女だけは違った。
「いいですわよ」
　即答するレイファ。
「どこでも好きな場所でやって下さい。できれば、自然が傷付くので老木を選んでいただければ幸いですが。それに、老木の方が呪いの伝達がよさそうですし、ね」
「そうですね。アドバイスありがとうございます、レイファさん」
　……そう云えば、例の丑の刻参りは結局やってないな。レイファの家の敷地内の樹海でする予定だったのだが、いざ行くとトラウマでできなかったんだよな……。
「なあ、丑の刻参りって、誰を呪うんだ？」
「マッドサイエンティスト櫻井さんよ！」

〈次回予告〉
　さてと、わかる人にしかわからないネタが続くわけだが、それにしても偏ってるな……まあ、俺は構わないが。つうわけで、次回予告の原稿だ。
　目の前に壁がある。壁は迂回するものでも乗り越えるものでもない。そう、壁は打ち砕くものなのだ！　壁は打ち砕いてこそ、その存在意義があるというもの！　さあ砕け！　粉砕せよ！
　ちゅぎのお話は？　次回、第４話【露天風呂への切符はコンギョク！】

金の玉が出たよ！
カラーン♪　カラーン♪　ってやつか。

「あいつか……」
　歩の呪いの相手を聞いてフムフムとやたらと納得する渡瀬。まあ、俺も事情を知らなくても納得するな。って、これほどまでのヤツって……さすがマッドサイエンティスト。凡人の俺には真似は出来んな。
「という事で、丑の刻参りけってー！」
「って、おい。そんな事公言していいのか？　誰かに見つかると呪いが逆流してくるとかしないとか……」
「そういやそうか。でも、いいんじゃないの。歩オリジナルって事で」
「よくねぇだろっ！」
「まあまあ、そのくらいにしておいて、ここでお詫びをしなければいけませんの」
　レイファが神妙な声を出す。
「申し訳ありません」
「どうした？」
「……食材が届いておりませんの」
「申し訳ありません。わたしの不徳の致すところです」
　新見さんがペコペコと頭を下げる。
「食材がないって……じゃあ、晩飯はどうなるんだ？」
　渡瀬が必死の形相で言う。
「いえ、全くないというわけではないのです。ただ、レイファお嬢様が皆様に食べていただきたいと思っておられた食材が手に入らなかったのです。本当に申し訳ありません」
　深々と頭を下げる。
「ちなみに、その食材とは？」
　渡瀬が訊く。なんとなく雰囲気で息を呑む。その中で新見さんが口を開く。
「その食材は……」
「その食材は？」
「その食材は、鮭児でございます」
　……けいじ？　っておい。あの鮭児か。
「デカだと？　なんだそれは？　だいたい、刑事なんてどう喰うんだ」
　馬鹿な事をほざく渡瀬であった。

〈次回予告〉
　なんだか、俺はすんごく馬鹿にされているな……だが、普通鮭児なんて知らないぞ。まあ、俺は知ってるがな。とにかく、なんにしても原稿だな。
　絶滅の危機。Ｍｙ絶滅危惧種に認定だ！　その生物は……。

ちゅぎのお話は？　次回、第５話【Ｍｙ絶滅危惧種そにょ１ーーへニュゥ】
タスマニアへ急行せよ！　絶滅の危機から救え！
……いいのか、これは。まあ、いいんだろうけどさ。楽しければいいじゃないか！

【刑事が追う鮭児の謎】

「お兄ちゃん、鮭児ってなに？」
　歩も知らないのか。まあ、俺も知ったのは最近だしな。
「鮭児ってのはな……」
　そう言いかけた俺をレイファが遮る。
「歩さん、鮭児ともうしますのは、一万～二万匹に一匹の割合で獲れる幻の鮭なのですわ。まあ、間を取って一万八千匹くらいという事にしておきましょうか」
「ちょっと待てぃ。間をとるなら、普通は一万五千匹じゃないのか」
「不動兄よ、それではアレと同じになってマズイだろ。だから、ここはあえてひねくれてみる方が正解だ」
　……アレ？　真剣恋愛か？
「……って、お前は知ってるんじゃないか」
「愚かな。誰も知らないとは言っていない。前回の発言をよーく思い出せ。俺はただボケただけであって、鮭児を知らないとは言っていない。それに、日本人なら鮭児くらい知っていて当然とあのアーマーなヤツも言っているだろう。これはれっきとした日本文化なのだからな」
　うっわー……正論に聞こえる。まあ、確かにそうだけどさ。
「だけどさ、この時期に鮭児なんて獲れるのか？　それってもうちょっと先の季節なんじゃないのか？」
　だいたい、今は夏。この時期に鮭などとは……鮭の旬はもう少しあとだ。
　まあ、養殖という事も考えられるが、レイファの場合はまずないと判断できる。こいつの事だから、天然ものだろう。
「というわけですので、申し訳ありませんが、本日、鮭児はございません」
「本当に申し訳ありませんでした。という事ですので、本日はメニューを変更しまして、トントロとツラミの網焼きにさせていただきますがよろしいでしょうか？」
　新見さんが深々と頭を下げてそう言った。

〈次回予告〉
　俺の予告も折り返し地点がやってきたようだな。淋しい事この上ない。
　だが、そんな淋しさに負けず俺は原稿を読むっ！
　絶滅の危機。Ｍｙ絶滅危惧種に認定だ！　その生物は……。
　ちゅぎのお話は？　次回、第６話【Ｍｙ絶滅危惧種そにょ２ーーホエ】
　ペルーの山奥へ急行せよ！　幻の生物の謎を追え！
　これはシリーズなのか？　まぁ、いっか。

【マンガ肉】

「トントロとツラミ……すごい違いだな」
　愚痴る渡瀬。
「本当に申し訳ありません」
　新見さんが深々と頭を下げる。
「おい、言い過ぎだぞ、渡瀬。別に新見さんが悪いわけじゃないだろ」
「違うぞ、不動。お前はわかっていない。鮭児とトントロとツラミを比べても面白くもなんともないと言っているのだ。もちろん、それらは美味い。それに対して文句などあろうはずがない。しかし、鮭児と比べると面白味に欠けるのだ。そう、真剣恋愛アレのように鮭児と肩を並べられるのは、マンガ肉のみ！　マンガ肉こそ男のロマン浪漫と云うではないか。あの人工的にしか作れない浪漫料理。鮭児と比べるのであればマンガ肉だと全国うん云万人の人が思っている。それと対を成すものとして挙げられるのが金華豚とうどん（本場讃岐うどんとネギと豆腐とシラタキと鶏肉）であろう。これぞ我がマ〇ラヴバイブルよりもたらされた定説なのだ！」
「長いぞ、お前の説明は！」
「では、マンガ肉をご用意すればよろしいのですか？」
　……なんと？　今なんと仰いました？　俺は声の主である新見さんを見る。
「マンガ肉ですか……作った事はありませんが、なんとかしてみましょう。マンガ肉の形を形成すればよろしいのでしょうか？」
「……できるんですか」
　目をランランと輝かせて渡瀬が言う。
「保証はできませんが、努力はしてみるつもりです。レイファお嬢様と今回の献立を作った私の責でございます。ですので、お詫びとなるかはわかりませんが、努力だけは致しまして、それを謝罪としていただければ幸いなのですが」
「お願いします。それに、謝罪なんて……俺は責めてなどいませんよ。マンガ肉をこの目で見れるなら、ノープロブレム！」

〈次回予告〉
　どうも俺の野望が叶いそうな展開だな。まあ、作中のネタはわかる人だけ笑ってくれれば……。関係者の方もまあ、笑って赦して下さい。というわけで原稿だ。
　絶滅の危機。Ｍｙ絶滅危惧種に認定だ！　その生物は……。
　ちゅぎのお話は？　次回、第７話【Ｍｙ絶滅危惧種そにょ３――グムウ】
　コスタリカ沿岸部へ急行せよ！　さっきゅう早急に保護せよ！
　三部作は終わりだな。

「本当に申し訳ないですわ。お招きしておきながら、おもてなしが出来ないとは……この紫藤麗華最大の汚点ですわ。新見、わたくしの専属シェフを総動員して、なんとしても完成させましょう、マンガ肉を！」
「はい、お嬢様」
　燃える二人。バーニングだな。
　だが、マンガ肉なんぞ、そう簡単にできるものなのか？　だいたい、あんな肉付きの部位はないから、完全に人工的に作るしかない。邪道だが、肉を削るのだろうか？　それとも正統で肉を大腿骨に挟み込むのだろうか？　とにかく、少し楽しみになってきた。
「レイファ、なんだか俺が我が儘を言ってしまっているようですまないな」
「いえ、家主は客人をもてなす事が仕事ですから。客人は、家主にもてなされるのが仕事です。あなたは、わたくしどもになにを求めているのか率直に仰って下さいました。それはむしろ有り難い事ではないでしょうか。そのお蔭で、わたくしどもは目的をはっきりとさせておもてなしができるのですから。のほほんとくつろいで、本当に楽しまれているのかわかりづらい客人よりも、よっぽど協力的です。渡瀬さんは、まさに客人の鑑ではないでしょうか」
「そうですね、お嬢様。私も同じ意見です。渡瀬様は、私のミスを責めるどころか、どうすればいいのかを示して下さいました。このような私の道標となって下さいました。本当にありがとうございます。この感謝を最大限にわかっていただけるよう、なんとしても最高級のおもてなしをさせていただきます。少々時間を頂かなくてはなりませんが、出来うる限りの最速で作ってみせますので、それまでごゆっくりとおくつろぎ下さい」
「ほう、料理の最速理論ですか……それは興味深いですね。わかりました。この渡瀬章一郎、客人として恥じぬよう、しかと努めさせていただきます」

〈次回予告〉
　本当に実現しそうだな、をい。できれば、俺が予告を担当している間に完成してもらいたいものだ。まあ、楽しみはあとにとっておいて、今は原稿だな。
　約束の島。そこでの出会い、再会。新しい家族。そして……新しい生活の物語。それは笑顔と涙に支配された時間。そんな時間に僕はいる。
　ちゅぎのお話は？　次回、第８話【それは十二人の……】
　やっと会えたね、お兄ちゃん。
　くーっ！　かーっ！　ついにやっちまったな。俺はモーレツに感動している！　これぞ金字塔！

　そして、数時間後ーー
「お待たせいたしました」
　銀色の蓋をかぶせた大きな皿をカートに乗せた新見さんがやってきた。
「おお、なんとも本格的な装い。そして、皿の中身を見えないようにしてじらして楽しみと感動を何倍にもさせるという微妙かつ絶妙なテクニック。さすがです。さすが紫藤家。道理というものをわかっている。やはりこういうものこそが本当のもてなしの心。まさに新見さんはもてなす者の鑑！」
「そんな……客人の鑑である渡瀬様に仰っていただいて、これ以上の賞賛はありませんわ。有り難う御座います」
　……なんだ、この会話は。やっぱ、新見さんも一癖も二癖もある人だったのか……。もっと、面白味のない人は……って、そんな事したら、面白くなくなるか。だけど、たまには静かに事が運ぶのもいいような気がするが……。
「では、早速……」
　そう言って、おもむろに蓋を開ける渡瀬。
「おおーっ！」
　そして、歓声をあげる。
「すごい、すごすぎる。この技術、こんな短時間でできるものなのか。さすが料理の最速理論！
　これを神業と呼ばずしてなにを神業と呼ぶ事ができようか」
「どれどれ」
　俺も覗き込むように皿を見る。
「なっ……」
　俺は言葉を失った。
　そこには、漫画などで見るマンガ肉の姿……まさにそのままの姿がそこにあった。
「すごいね、お兄ちゃん」
「ああ、すごすぎるだろ」
　それは素人が作る似た形などではなく、まさにあの形のものだった。
「これで満足していただけましたでしょうか？」

〈次回予告〉
　まさか、こんな形で夢が叶うとは……。男の浪漫ここにあり！　さあ、この喜びの気持ちのまま原稿をよもーっ！
　どうして好きになったんだろう。恋なんて所詮は幻なのに**……**。少女は涙を流した。恋さえしなければこんな気持ちを味わう事もなかった。なのに、どうして好きになってしまったんだろう。少女は自分を呪った。壊れちゃいそうだよ。だから強く抱きしめて。

ちゅぎのお話は？　次回、第９話【ラヴマジック～ウィザード・オブ・ラヴ降臨！～】
あなたの心に愛を届けます。
おいおい、急に雰囲気変わってないか？　今までの萌えはどこに……。まあ、いいんだけどね。

【不動和己の考察と結論】

　そんなこんなで美味しくマンガ肉を食した俺たちは、くつろいでいた。
　もう、大きなゆったりとしたソファでまったりと過ごしていた。
　そして、就寝時間を迎えた。
　以前、一夜を共に過ごした……って書くと妙にイヤラシイが、実際はそんな事もなく、ただ同じ部屋で……って書いても誤解を生みそうだが……そんな事も一切なく、本当に何事もなく、詳しい事は『あたしはあなた？　あなたはあたし？』を読んでもらうとわかってもらえるので、そっちで確認してもらう事にして、とにかくなにが言いたかったかというと、その時知ったのだが、レイファはその日中に眠るという事だ……って、長い文章だな。これで一文かよ。
　つうわけで、就寝時間は二十三時半くらい。すごい健康的つうか、ただ単に早いつうか……表現に困る時間だ。
　まあ、色々な事があって疲れたし、瞼と瞼がゴッツンコッ！　しそうだし、いいんだけどね。
　そんな風に考えていた時だった。
「レイファさん」
「なんですの、歩さん」
「今夜、早速やっちゃってもいいですか？」
「やるって……あぁ……アレですか」
「ええ、ソレです」
「承認しますわ」
「ありがとうございます」
　……アレ？　ソレ？
　ここで考えられる事……。
　一つ、アレとソレは同じ事柄である。
　一つ、その事柄はレイファの許可を必要とする。
　一つ、アレ、ソレで通じるという事は、過去にその話題が出てきている。
　以上から察するに……。
「歩、ついに実行するのか」
「うん。やるよ、丑の刻参り！」

〈次回予告〉
　なんだか、俺の出番がなかったのだが……なんとも残念だ。遺憾だ。まことに遺憾だ。これではいかんぞ。……原稿読むか。
　彼は私の全てだった。彼女は僕の全てだった。そんな二人。しかし、世界は無常。そんな二人を容赦なく引き裂いた。されど、心までは引き離せない。ずっと信じているから。二人を繋ぐ最後の希望……それはあの時交わしたおまじない。それを信じて二人は今日も生きる。いつか会え

ると信じて。

ちゅぎのお話は？　次回、第１０話【永遠】

夜空に星が瞬くように……。

なんだか、絶対に違うってわかる予告が当たり前になってきたな。

【少女の行動】

　そして深夜、丑の刻ーー
　一人の少女がそこにいた。
　彼女以外、生物の姿は確認できない。
　全てが眠りについてしまったかのような時間。
　朝でも昼でも夜でもない……逢魔ヶ刻を彷彿とさせる時間。
　そんな時間にただ一人の少女。
　彼女は白い服装で身を固めていた。
　その白さが月明かりに照らされて一種、異様な存在となっている。
　だが、その月も次第に雲に隠されていく。
　そして、周囲は完全な闇に包まれる。
　彼女の頭には鉄輪。そこには、まだ火が付けられていない蝋燭が立っている。
　慣れていないためか、時々転びそうになる。
　それは当然かも知れない。
　普段、一本しか歯のない下駄など履く事はないのだ。だが、彼女はそれを履いていた。
　彼女は不安定なまま夜の森を進む。
　そして、老木の前に立つとそれを見上げ、口許を歪めた。
　ゆっくりと優しくその老木を撫でる。感謝するような、謝罪するような……その両方の気持ちがそこにある。
　そして、彼女はおもむろに深呼吸をするとマッチで頭の蝋燭に火を付けた。
　途端、周囲が明るくなる。
　その灯りで、彼女の表情が闇に浮かぶ。
　その顔には、真っ白に塗られ口許は紅く染まっていた。
　そして、少女は懐から人形を取り出した。その人形は藁でできていた。
　それを見て、少女は不気味に笑う。
　さらに五寸釘を取り出すと、それを人形に押し当て、続いて老木に押し当てた。
　一呼吸し、木槌を取り出すと、その釘を打ち付けた。
　ーーコーン！　コーン！
　乾いた音が深夜の森に響き渡った。

〈次回予告〉
　なんだか、いつもとテイストが違うんだが……。……原稿でも読んで逃避しようか。
　オルゴール。それが残された最後の思い出の品。あとは心に刻まれた記憶だけ。切ないよ。苦しいよ。痛いよ。悲しいよ。泣きたいよ……。でも、泣けないのはどうして？　泣いて忘れてしまいたいのに。泣いたら忘れられるかもしれないのに……。

ちゅぎのお話は？　次回、第１１話【突然の別れ】
あなたの悲しい過去、聞かせて下さい。
つうか、元ネタもなんにもないんだな、今回は。なんだか最近、真面目に嘘予告やってるよな……。って、カンペだ。
渡瀬章一郎様、まことに残念ではありますが、今回で貴公の予告はお終いとなります。またいつか再会できますように……。
って、マジで？　……さようなら、そしてありがとう。次は、多分……以下略。

……。
……。
……。
俺は心地よい闇の中にいた。どこまでいっても闇だけど、とっても心地いい。ずっとここにいたいくらいだ……。
「……ゃん」
……ん？　なんだか、揺れるな……。
「……ちゃん」
ああ、だんだんと闇が薄れていく。
「……お兄ちゃん」
……誰の声だ？　誰かが呼んでいるような気がする。
「お兄ちゃん、起きてよ」
……ん？　……この声は……？
「……っていうか、起きろっ！」
声色が変わった。……ヤバッ！
俺は慌てて飛び起きた。
「あっ、起きた」
と、残念そうな声がした。
俺の目の前には分厚いディクショナリーがある。英語なのに意味はないので無視して欲しい。
「お前は、どうしてこう、いっつもいっつも俺を殺そうとするんだ」
俺はディクショナリーを構えている妹に言った。
「だから、いつも言ってるけど、だったら自分でちゃんと起きなさいよ。だいたい、レイファさんの別島に来てまであたしに起こされなきゃいけないって、どーゆー事よっ」
「そ、それはだな……」
「もしかしてお兄ちゃん、ちょっと変わった趣味になっちゃった？　どうしよう、あたしのせいだ」
「歩、なにを慌ててるのか知らんが、俺は虐められ好きじゃないぞ」
「そっか……よかった」
心底安心する歩。まあ、これがなきゃ始まった気がしないのは確かなんだが。

〈次回予告〉
やっほーっ！　ついに真打ち登場だね。なんたって、あたしはこの物語のメインだしね。主人公（仕方ないけど事実だから赦そう）の妹つったら、これはある意味、真の主人公でしょ。まあ、あたしがこのトリを……え？　なに？

　それは違う。
　うっさいわね。初回からカンペなんて前代未聞ね。
　前置きが長い。さっさと予告をお願いします。
　その丁寧なんだか違うんだかよくわからないカンペ、どうにかならない？　まあ、仕方ないから予告ね。先はまだまだ長いんだし、時間を掛けてゆっくりと。じゃあ、原稿ね。
　南の島の夜が明ける。朝の新しい空気に触れ、若者たちは自然を満喫する。自然の中、若者たちの冒険心が疼く。
　ちゅぎのお話は？　次回、第１２話【指令！　別島の謎を解明せよ！】
　そこは謎に包まれたミステリック・アイランド。
　……ねえ、これって本物っぽくない？

【指令！　別島の謎を解明せよ！】

「気持ちいいな」
「そうだな」
　窓辺に立ち、渡瀬と一緒に潮風に吹かれ自然を満喫する。
「やっぱ、都会と違っていい感じだな」
「そうだな」
　大きく深呼吸をする。
　澄んだ朝の空気が気持ちいい。
　潮の匂いもなんだか新鮮な感じで心地いい。まさに大自然に抱かれているって感じだ。
「なあ、この島ってどうなってるのかな？」
「昨日、船の中で聞いただろ」
「でもさ、百聞は一見に如かずつぅだろ？　それに、ピュア純粋な好奇心ってヤツがさ、疼くんだよね。ほれ、男特有の冒険心ってヤツがさ」
「まあ、わからなくはないが……」
　確かに気持ちは分かる。だがしかし、こいつの口から〝ピュア純粋〟なんていう言葉が出てくるとは……大自然恐るべし。
「さすがだ、同志よ」
　肩を組んでくる渡瀬。
「誰が同志だ、誰が。それに、肩を組む気はないっ」
　肩に回された手を……って、こう表現すると妙にえっちぃな――じゃなくって、渡瀬の手を振り払う。
「まあ、照れるな、同志よ。俺たちは少年のハートで冒険を楽しもうではないか。まあ、確かにレイファや不動妹の水着姿を見ないのは男として無意味。だがしかし、今日のところはこの土地の情報を知る事を優先しようではないか。そうすれば、明日はあんな事や、こんな事が……そうさ、夏・南の島……その二つが揃えばアバンチュール！　わかるだろ？　この気持ち」
「大半を却下させてもらうが、確かにこの島を知りたいのは事実だ。同意する。だが、お前の言うような事は考えていない事だけは明言させてもらう」
「照れない、照れない。はっはっはっ……」

〈次回予告〉
　え？　あたしの出番なし？　しかも、前の予告は本物だし。どういう事？　どうなってるの？
　嘘予告が読めるっていうから楽しみにしてたのに。ねえ、どういう事？
　たまには、本物の予告もいいかなって……。
　ふざけんじゃないわよ。あたしの楽しみを奪っていい権利なんてあなたにあるの？　いくら筆者だからって、やっていい事といけない事くらいあるのがわかんない？　もしかして、無能？

いいから、予告を読んで下さい。余談ですが、今回も本物です。
ったく……とにかく原稿は読むから、次はちゃんと嘘予告をお願いね。
旅立つ二人。未知の領域に踏み込む。そこは密林が生い茂る薄暗い森。
ちゅぎのお話は？　次回、第１３話【出発！　未知の領域へ】
それは誰も知らない事件への扉だった。
むきーっ！　むかぴー！　アユレーザー！
――ジュゥッ！

【出発！　未知の領域へ】

　というわけで、歩やレイファには内緒で森の中にやって来た俺と渡瀬。いやぁ……そんな事するものじゃないな、と……早速後悔している。はやっ、とかいうツッコミも甘んじて受け入れる。
　野生エリア、恐るべしだ。レイファの家の樹海に負けず劣らず……あぁ……歩のトラウマも今じゃ理解できるぞ。歩、兄はお前の気持ちを理解した。
　辛かったんだな。淋しかったんだな。怖かったんだな。
　だけど、俺は一人じゃないからお前ほどじゃないかもしれない。でもな、俺はお前の気持ちを理解した事だけはわかって欲しい。な、歩。
「なあ、不動」
「なんだ、渡瀬」
「どうする？」
「どうするったってな……」
　右も左も鬱蒼とした木が生い茂っているのみ。光が射し込まないから薄暗くてよくわからない。
　渡瀬が助けを呼ぼうと携帯電話を取り出したが、案の定ここは圏外。まあ、島自体はそうじゃないんだろうけど、さすがにこの中じゃ無理のようだ。
「とにかく、真っ直ぐ進もう」
「真っ直ぐだ？」
「そうだ。レイファが言っていただろ、この島は周囲四㎞の島だって」
「ああ。だけど、それがなんだっていうんだ？」
「わからんか。よく聞け、渡瀬。簡単な事だが、そのうち海岸線に出る」
「ああ、それはわかる。だが、こっちの方は断崖絶壁とも言っていたよな。とすると、どこから崖なのかわかるのか？　木が覆い被さっているが実は地面はもうありませんじゃダメなんだぞ」
「……」

〈次回予告〉
　なんだか大変な事になっちゃってるわね。これも、あたしを話から追い出した罰よ。天罰。もう、お兄ちゃんも渡瀬さんも……。
　ああ、それ以上はダメ。
　どうして、あたしの回だけ筆者が口出すわけ？
　いや、なんとなく。
　もしかして、歩ちゃんラヴ？
　……さてと、次回のヒロインはレイファと新見さんで**……**。
　あぅ〜、そんなのヤダ。ヒロインはあたし。あたししかいないでしょ。ほら、ちゃんと原稿も

読むから。
　では、どうぞ。

　森の中で迷った二人。出口を求め彷徨う。そんな二人の危機を未だ知らないレイファと歩。ああ、無常。
　ちゅぎのお話は？　次回、第１４話【光射す場所へ！】
　彼らは脱出口を探す。
　シリアスな展開じゃない。でも、やっぱりあたしは嘘予告が読みたいのっ。アユビーム！
　――ジュゥッ！

　なるほどな。そういう事も考えられるのか。渡瀬にしてやられた気分だ。
「わかったか、不動。お前のその行動が不用意なものだという事が。だが、その発想自体はいいじゃないか。だから、こうしよう」
　そう言って渡瀬は落ちていた長い棒を拾った。
「なるほどな」
「わかったか。これで足元を確認しながら進もう。実際はどちらかが前を歩き、どちらかがそれに続けばいいわけなのだが、ここはあまりに未知の領域すぎる」
「わかっている。俺も棒を探そう」
「そういう事だ。なんだか、俺たちはテレパシートークが出来ているようだな」
「その表現はともかく、互いの考えは一致しているようだ」
「よかった。こういう危機的な状況で意見が食い違う事ほど致命的なものはないからな。意見が一致している事に越した事はない。だが、それも諸刃の剣。あまりにも同じすぎると間違いに気付かない場合がある」
「確かにな。だが、俺たちの場合は大丈夫じゃないか？　だってさ、さっき渡瀬は俺の盲点を指摘してくれたしな」
「そうだ。互いの考えは同じなようで、似通っているだけだ。どこかで冷静に相手の考えを考察する事ができる。そう、俺たちこそ最高のパートナー！　つうわけで、ずっと親友でいてくれ。そして、俺の人生を薔薇色にしてくれ！」
「って、結局はそれかよ。何度も言っているが、俺はレイファとは……」
「不動、正直になれ。船の中でお前はなにかを言おうとしたな。なんだ？」
「それは……」

　その頃――
「そういえば、お兄ちゃんと渡瀬さんは？」
「さあ？　どこにいかれたのでしょうか？」

〈次回予告〉
　そういえば、お兄ちゃんって船でなにか言いかけてたわよね。アレってなに？　もしかして告白？　って事は、レイファさんはあたしのお義姉様？　念願の社交界デビュー！　あたしも富豪の仲間入り！　お嬢様よ、お嬢様！　お・じょ・お・さ・ま！
　歩さん、前振りが長いです。早く予告を。
　うっさいわね。あたしは今回一言しか出番がなかったのよ。いいじゃない、少しくらい喋らせてくれても。
　わかりましたから、予告を早く。無駄に長くなっていってます。

　仕方ないわね。慈悲深いこのあたし。もうすぐお嬢様になれるこのあたしが愚かな民の筆者を救ってあげるために原稿を読みますか。
　協力しあう不動和己と渡瀬章一郎。二人はこの暗闇から抜け出そうともが藻掻く。しかし、光は見えない。だが、２人は諦めず光を求め歩き続ける。
　ちゅぎのお話は？　次回、第１５話【これを人、友情と呼ぶ】
　ああ、熱き感動を……。
　ねえ、いい加減さ、嘘予告したいんだけど。もぅ！　アユサンダー！
　ーーズババッ！

「なにを言おうとしたんだ？」
　なにって……なぁ？
「……そうか。まあ、言い辛いなら言わなくても構わない。無理強いする事ほど相手を傷つける事はないからな。俺はお前の親友としてお前を追いつめるような事をする気はさらさらない。安心してくれたまへ」
　……言葉だけ聞けば言いセリフなんだろうが、その裏に隠されたものを知っていると……なんだかな。
「そうか。まあ、そのうち言うさ」
「わかった。だが、別に俺に言う必要はないだろう。それを言うべきなのは、むしろレイファにじゃないのか？」
「まあ、なんにせよ、いっか」
　どうでもいいさ、どうでも。
「とにかく、ここを出ようか」
「そうだな」
　ってなわけで、俺たちは密林の中を歩き始めた。棒で足場を確認しながらゆっくりと進む。
　そんなこんなで一時間くらい経っただろうか。普通の道ならそんなに掛かる事はないが、やはりこういう道だと時間が掛かって仕方ない。
「渡瀬、大丈夫か」
「ああ。不動こそ平気か？」
　なんだか、互いの事を心配しあいながら進むってのもいいかもな。
「なあ、そろそろ海岸線に出る頃じゃないか？」
「そうだな、不動。ここからはさらにゆっくりとい……おわっ！」
「どうした、渡瀬」
　俺は前を歩いていた渡瀬に駆け寄ろうとしてしまう。
「寄るな、不動！」
　その声にハッとする。ここで俺が走ってしまったら、渡瀬と同じかそれ以上の危機に陥ってしまうかもしれないのだと。

〈次回予告〉
　なんだか、お兄ちゃんたち死にそうじゃない。でも、死なれちゃ困るんだよね。社交界にデビュー出来ないじゃないの。あ、でも、そうすればお兄ちゃんの代わりにあたしが主人公に……お兄ちゃん、忘れないから、ちゃんと成仏しなさいよっ。
　歩さん、そんな物騒な事やめて下さい。
　うっさい、筆者。つうか、こういう展開にしなさいよっ。

早く原稿を……。

わーったわよ。読むわよ、読めばいいんでしょ。んじゃ、原稿！

危機……！　ピンチ……！　苦境……！　逆境……！　崖っぷち……！　そう、彼らはまさに崖っぷち。どう切り抜ける。さあ、瀬戸際で足掻くのだ。藻掻け！

ちゅぎのお話は？　次回、第１６話【危機を砕けっ！】

危機を突破して人は強くなる。

……なに？　なに、これ。アユスラッシュ！

――シュバッ！

【危機を砕けっ！】

「渡瀬、絶対になんとかするからじっとしてろよ」
　そう言って、俺はゆっくりと前に進んでいく。足を踏み外さないように慎重に確かめながら歩く。
「不動、無理するな」
「ばーろーっ！　無理じゃねぇ。だいたい、お前を見捨てれるわけないだろーが」
「不動……」
「だから、待ってろよ、渡瀬」
「お前っていいヤツだな。その意気込みで俺のライフを……」
「却下」
　即答。
　つうか、こいつの思考はこういう状況下においても変わらないのか。
　それとも、わざと……なんだろうな。
　だったらなおさら、余計に早く助けなきゃって気になってくる。
　渡瀬、待ってろ。
「不動……」

　その頃――
「お兄ちゃん、どこ行った？」
「本当ですね。不動さんはどこに行かれたんでしょう。それに渡瀬さんも……」
「もしかしてあの二人、あたしたちの生着替えを覗こうとか、んな事を考えてひっそりと計画を実行させてるんじゃないでしょうね。そりゃ、あたしたちは魅力的かもしれないけど、それは犯罪だし……やっぱり、まがりなりにも兄妹なんだし、犯罪者の妹ってのはイヤだしね」
　と、一番最後が本音の歩であった。
　二人は、別段いなくなった二人を心配する事なく、ビーチで遊ぶ計画を練っていた。

　戻って、不幸な二人は――
「渡瀬、もうすぐだ」
　不動は渡瀬に手を差し伸べた。

〈次回予告〉
　なんかさ、あたしたちってタダのノーテンキに描かれてない？
　そ、そんな事はありません。
　こら、筆者。どうしてそこでどもる。
　そ、そ、そ……んな事は……。

まあいいわ。とにかく原稿を読んであげるわ。
救出作戦実行。危機紙一重。心配心配。
ちゅぎのお話は？　次回、第１７話【脱出光】
脱出目前。
漢字ばっか？　それにまじ本当予告だし。嘘予告希望！　アユトルネード！
――ゴウゥッ！

【脱出光】

「不動……」
　手を伸ばしてくる渡瀬。
「もう……ちょっと……だ」
　俺も必死に手を伸ばす。片方の手で木を掴み、なんとか落ちないように踏ん張る。まあ、足元は確認済みだから大丈夫だろうが、崩れないという保証などないので気が抜けない。
「ふ……どう……」
　ーーズザッ！
　渡瀬のいる場所が少し崩れた。
「不動、俺の事はもういい。このままじゃお前まで死んでしまう」
「ばーろーっ！　んな事したら、寝覚めが悪くなるだろーが」
「ふっ……」
　ったく、どうしてこんなバーニングな会話をせにゃならんのだ。これじゃ、熱血ものそのものじゃないか。

　でもって、別荘ではーー
「気持ちいいね、レイファさん」
「そうですわね、歩さん」
　歩とレイファは波打ち際で海と戯れていた。
「たっのしー！」

　でもってでもってーー
「渡瀬」
「不動」
　二人はガシッと手を繋いだ。
「助かった……」
　渡瀬は不動の手を支えに大地に降り立った。
「渡瀬章一郎降臨！　我、無事生還せり！」
　両手を挙げて高々と吼える。
「ったく……どうしてこうなるんだ」
「まあ、無事だったんだからいいじゃないか」
「お前が言うな」
　ったく……ホント、無事だったからこんな風にできるんだよな。よかったよ。

〈次回予告〉

まあ、お兄ちゃんたちが助かってよかったんだか残念だったんだか。まあ、残ってくれないと話が終わってしまいそうで怖いわね。

当然でしょ。不動和己さんがいなくなれば、この話は終わりですよ。

でも、歩ちゃん冒険記が始まるんでしょ？

嘘ぶっこかない。

まあ、そのうちお願いね。原稿読むからさ。

生還を果たした二人。そんな二人を少女たちは笑顔で迎える。そこはまさに……。

ちゅぎのお話は？　次回、第１８話【パラダイス】

女神たちの楽園。

なに？　なにこれ。筆者さんのお詫び？　でも、嘘予告じゃないから……アユクラッシュ！

ーーゴフッ！

　ボロボロだった。
「不動……」
　俺の肩を支えにしている渡瀬。お、重い……でも、捻挫したとかでほっとくわけにもいかんしな。
　あれから、なんとか崖っぷちを脱出して、足を踏み外さないように注意しながら海岸線を歩いて、ようやくこの砂浜までやってきた。
　生活エリアが見えた時は、まさにここが天国に……って言うと、あんな目に遭った後だとなんだか縁起がいいような悪いようなだから、楽園に来たかと思えたもんだ。
　そんな楽園に美女二人が……ん？　美女？
「こら、お兄ちゃん。どこ行ってたのよっ！」
　というか、ご立腹の歩に迎えられた。
「本当ですわ。お二人ともどこに行ってらしたんですの？」
　って、この状況下でそれはないだろ……。
「レイファ、不動妹……すまんが休ませてもらえないか」
「そ、そう……あとで話すから、とにかく休ませてくれ」
「仕方ないわね。あとで尋問だからね」
　尋問って……。
　俺は渡瀬と一緒に別荘の中に入った。だが、あてがわれた部屋まで行く力はなく、そのままリビングで倒れてしまった。
　渡瀬は捻挫の治療を新見さんにしてもらった。新見さんは正看護師の資格を持っているらしく、とても手際がよかった。
　俺も、傷などの手当てをしてもらい、ゆっくりと目を閉じ夢の中に落ちた。
　……。
　……。
　……。
　あぁ……疲れた……。しんどかった……。
　ホント、無事でよかった……。
　平静っていいな……。
　でも、どうして昨日といい今日といい、死に直面するんだろう、俺。不幸だ。

〈次回予告〉
　無事に帰っちゃったみたいね。とにかく、あたしが主役の物語をする前に終わってもらっちゃ困るからいいんだけどね。
　って、いつ歩さんメインをするって……。

今。たった今、決まったの。これは覆せない決定事項なの。
だから、筆者側の許諾なしに……。
うっさいわね。あんたなんかに描かれているんだから、たまにはおいしい思いをしたっていいじゃない。
まあ、前向きに……。
却下。そんな大人の断り方はいいから。ほら、ちゃんと原稿を読んであげるから、善処しなさいよっ！
生還した二人。彼らは命を懸けた冒険を経験した。まさに人生崖っぷち。そんなこんなで夏は流れていく。もうすぐ夏が終わる。
ちゅぎのお話は？　次回、第１９話【秋の足音】
時間はかくも無常に流れゆく。
って、今は冬だしね……。なんだか妙にしんみりしちゃって……原稿を抹消する元気もないわね……。

　闇の中にいる。周りになにもない。ただ、闇が拡がっているだけ……。
　夢か……。
　そうだ、俺は眠ったんだ。疲れてたもんな……。あまりに疲れすぎて、逆になんの夢も見ていないんだ。
　不思議と意識だけはハッキリとしている。
　あぁ……このままいつも通り歩に起こされるんだろうか……。
『……にいさん』
　ん……？　あれ……？
『……兄さん』
　これは歩の声じゃない。かといって、レイファでもない。じゃあ、新見さん？　……でも、新見さんがこんな風に起こすなんて……。
『兄さん、起きて下さい』
　俺は慌てて目を開けた。すると、そこには広辞苑があった。
『あっ、起きた』
　広辞苑の向こうにはさっきの声の少女がいた。どこかで見た事があるような……。
　俺は記憶の糸を辿った。
　……あっ、微熱少女だ。黄色いリボンと首の鈴が印象的な微熱少女がそこにいた。……って事は、このままおでことおでこをくっつけて熱を測って……をっ、これはまさに萌えの境地。こそばゆい恋愛か。
　……って、夢に決まっている。
　そう思った瞬間、目が覚めた。惜しい事をしたな。あのまま……はふぅ〜。
「目が覚めたようだな」
　渡瀬か……。
「ああ、すっかり眠ってしまったみたいだな。お前は大丈夫か？」
「ああ、不動のお蔭でなんとかな。サンキュな。それはそうと、今夜の夕食は鮭児だそうだ」
「マジで？　入手できたのか？」
「まあ、時期尚早な気もするが、本物のようだ」

〈次回予告〉
　なんだか、終わりが近付いてきたみたいね。よく考えれば、みんなが当たり前のように読んでいた嘘予告を一度も読んでいないんだよね……。
　歩さん、検討の結果、嘘予告はなしという事で決定しました。
　あんですとーっ！　歩様の苦労はなんなの？　筆者だからって、愛しいキャラであるあたしの楽しみを奪う権利があるっての？　もう、今回は予告読んだげないからっ。……アユビーム！

――ジュゥッ！

というわけで、今回は筆者のカンペでご勘弁を。

目を覚ました二人を待つのは、レイファの最大級のもてなしだった。幻の珍味に舌鼓を打つ一行。それは至福の時であった。こうして、夏が終わりを告げようとしている。

ちゅぎのお話は？　次回、第２０話【おもてなし達成記念日】

……今日はおもてなし達成記念日だね。

まあ、カンペだろうがなんだろうが、あまり変わりないですけどね。

【おもてなし達成記念日】

　俺は渡瀬と一緒に食堂へ向かう。
「お目覚めになられたみたいですね」
　新見さんが迎えてくれた。
「ええ、ありがとうございました」
　手当てしてもらった礼を言う。礼儀だな。
「いえいえ。当然の事をしたまでですから。紫藤家のレイファお嬢様の侍従としては、必須のスキルですから」
　古めかしいのかナウい（死語）のか謎だ。
「とにかく、お嬢様も歩様もお待ちです」
　そう言って、扉を開けてくれる。
「ありがとうございます」
　礼を言ってから中に入る。
「お兄ちゃん」
「よかったですわ」
　歩とレイファの笑顔に迎えられる。
「本当に、ご無事でよかったですわ。もしお二人になにかありましたら、わたくしの責任ですから……本当に申し訳ありませんでした」
「レイファ……悪いのは俺たちだから、そんなにしなくても……」
「そうだって。不本意ではあるが、今回の事は明らかに俺たちが悪い」
「俺たちじゃなく、お前だ」
「醜いぞ、不動。俺たちは同罪だ。ここで醜く罪のなすりつけあいをするなぞ、見苦しいにもほどがあるぞ」
　……正論じゃんかよ。
「というわけで、俺たちが全面的に悪い。レイファは最善を尽くしてくれた。現に、今ここには鮭児がある。家人として、客人に最高のもてなしをしているではないか。これを責める者なぞ、いるはずがないだろう」
「そういう事だ。俺も渡瀬も無事だったわけだし、こうして幻の御馳走まで食えるんだから、誰もレイファを責めないって」
「そうだ。今日は〝おもてなし達成記念日〟としようじゃないか」
「いいですわね、それ。そうしましょう」

〈次回予告〉
　突然ですが、これで歩さんの予告は最後です。
　むか〇ー！　らみねー〇ちゅーぶ！　ま〇らだーんく！

あ、歩さん。そんなネタやめましょう。

だって、最後なんでしょ。つう事は、やりたいように……はっ、ダメだわ。ここでこんな事をしてしまっては、あのマッドサイエンティストと同類になってしまう。という事は、次回のあたしの出番が……ごめんなさい。筆者さん、謝りますから、次回作でもあたしを出して下さい。ちゃんと、心を入れ替えて本当予告でも嫌がらずに原稿を読みますから。

夏が終わろうとしている。今までになかった季節が終わろうとしている。若者たちはそれぞれの想いと思い出を胸に我が家に帰る。

ちゅぎのお話は？　次回、第２１話【夏との別れ】

それは新たな物語の始まりでもある。

みなさん、歩ちゃんをこれからもよろしくねぇ〜！

【夏との別れ】

　そんなこんなで楽しい一日が終わった。そして、楽しい夏が終わろうとしている。
　あの日から数日は特に事件もなく過ぎていった。強いて挙げるなら、渡瀬がレイファと歩の水着姿を堪能しすぎて、歩の鉄拳制裁を食らったくらいだろう。
　そして、今日ーー最終日となった。
「さあ、帰りましょうか」
「名残惜しいです。もう少しいませんか？」
「そうですが、申し訳ない事にわたくしの都合がつきませんの」
「だったら、俺たちだけでも……」
「やはり、責任をとれる者がいませんと……」
「そうだぞ、渡瀬。俺たちは前科があるからな。あまりレイファの負担になるような事は言うな」
「さすが不動だな。もう、逆玉を狙っているのか」
「しつこいぞ、お前は……」
「そういえば、不動さんは船の中でなにか言いかけていませんでしたか？」
「そうだよね。お兄ちゃん、なにを言おうとしてたの？　ほれ、ゲロッと吐いてしまいなさいよ」
　歩……そんなグロい言い方はないだろ。お食事時の方もいるかもしれないしさ……。
「そうだぞ、渡瀬。どうなんだ、おい」
「もう、いいだろ。さ、帰ろうか」
　ここはさっさと話を逸らす事が最善だ。
「不動さん、わたくしも聞きたいですわ。どうなんですの？」
「ああ、もう、うっとーしーな！　んな事、どうだっていいじゃないか。ほら、早く行かないと、レイファはなにか用事があるんだろ？」
「話を逸らすなっ！」
　ーーゴフッ！
　歩のカバンが飛んできた。
「あ、死んじゃった……」
　ったく……こんな終わり方？

Ｆｉｎｏ．

〈座談会〉

歩「ねえ、なんだかすんごく中途半端じゃない？」
渡瀬「きっと、上手く終わらせられなかったんじゃないのか」
歩「渡瀬さん、あまりそういう事を言うと、筆者さんからリストラ宣告されるよ。現にマッドサイエンティスト櫻井も降格させられたんだし」
渡瀬「そうか、それは申し訳ない事を。あれは心にもない失言ですので」
歩「それにしても、座談会っていうわりには、あたしと渡瀬さんしかいないんだね」
和己「歩！　お前、嘘の時間を言っただろ」
歩「あ、来ちゃった」
和己「お前は……最後で俺を殺しかけて、今度は嘘を……」
麗華「不動さん。もういいじゃないですか」
歩「そうだよ、レイファさんの言うとおりだよ」
和己「お前な……まあ、いっか。そろそろこの座談会も終わりだってさ」
渡瀬「まだなにも話してないぞ」
和己「無駄な事ばかりするからだ。ここで、次回作の宣伝をしなけりゃならんので、原稿を読むなーー次回は、名探偵不動和己・歩兄妹が難事件を解決する……はず。だってさ」
歩「よかったよ。次回でもちゃんと登場できるんだね」
麗華「でも、難事件ってどんなのでしょうか？」
渡瀬「さあな。だが、俺は登場できるんだろうか？」
　ーー登場します。
渡瀬「おおっ、天の声が聞こえた。やったー！　次回作でも大活躍なんだな」
和己「というわけで、次回からはーー『夢幻世界の難事件』。おっと、原稿に追記があった。オチで怒らないで下さい……だそうです。ではーー」

Ｒ－３　別島での冒険

http://p.booklog.jp/book/34475

著者：芳田尚哉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/34475

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/34475

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.